

---

# ほむら

工藤るう子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ほむら

### 【ZPDF】

Z9876C

### 【作者名】

工藤るいづ

### 【あらすじ】

まだ妖魅が人間たちと混ざっていた時代、偶然出会った貴と彼に気に入られた少年の話。（転載）

そつと、その頬に触れてみた。

熱い。

あまりに下がらない熱に、脳に影響がおよぶのではないか と、  
自分の心配に、太智花は瞠目した。

どうでもいいことだ。

即座に、打ち消す。

貴珠の体調は良いにこしたことはないにしても、狂つていようが、  
白痴であろうが、さしたる問題ではない。まあ、凶暴なのは、困るが。

禰に仰臥しているのは、血の氣とてほとんど感じられない、青白  
い顔をした貴珠である。

汗に濡れ寝乱れた黒髪に、こけた頬。苦しさにか薄く開かれてい  
るくちびるのあわいからは、忙しく浅い息が繰り返されている。

かすかにかおる甘い香に導かれるようにして、見下ろしている太  
智花の視線が、どうにかふさがりかけた喉もとの赤い傷跡へと、移

動した。

喋れないかもしません。

連れてきた人間の医師が、震えながらそいつ叫びたのを思い出す。

傷は思いのほか深く、声帯を損ねているらしい。

自ら喉を突いたのであろう傷を痛々しく感じている自分を、太智花は強く意識せずにはおれなかつた。

変だ。

おかしい。

自分は、じつじつ性格をしていたるつか。

自分は、死に瀕した貴珠に、笑いながら牙を立てることができる。もがき苦しむさまを楽しみながら、最後の血の一滴を啜るために、より深く牙を突きたてることを、好んでさえいた。

貴珠の断末魔の喘鳴すらもを心地好いものと感じながら。

自問自答に飽きた太智花は、掛けていた椅子からやおら立ち上がつた。

禍に仰臥する顔色の悪い貴珠に後ろ髪を引かれながら、あること

を確かめようと、太智花は、部屋を後にしたのである。

### 「太智花さま」

「幾日ぶりですね」と、声を弾ませて、先ほどの貴珠とはうつて変わつて顔色のよい貴珠が、太智花に気づき駆け寄つた。

屋敷から庭を隔てた離れの貴珠の館に、今はただひとりきりで住まつてゐる少年である。少年の見掛けをしたその淡い褐色の双眸にたたえられている媚に、太智花の心が動くことはない。

これまでも。

そうして、これからも。

ずっと、お待ちしていたのですよ しおらしげな態度と、線の細い少女めいた外見に隠された本性を、太智花は、もとより知つている。

かつてここには、入れ替わり立ち代り、十を数える貴珠がいた。そのすべてを、彼は平然と、いや、笑いながら、追い落としてきた。

それは、太智花にとつて、暇つぶしになるといざの芝居ではあつたのだ。

貴に血を啜られた貴珠は、ある種の不老不死となる。

貴珠を葬り去るのは、唯一、貴だけである。

貴珠といえば、その大半が他人よりも優れた容姿を持っているためなのだろうが、美しいと言われるものほど自分の容姿に執着する度合いが強い傾向にある。人間たちの中にあればあるだけ、美貌と呼ばれるものは、その周囲にあるものの心を捕らえるものであつたのだろう。容貌の変化を恐れる貴珠は、貴のものとなれば容姿が衰えなくなると知つた途端、進んで、血を吸われようとした。そうして老いる恐怖を忘れ、暇をもてあました貴珠は、ある時ふと気づくのだ。老いるはずのない自分の容姿の衰えに。不老不死とはいえたつた一つの例外を除いて、貴に血を吸われた貴珠は、定期的に貴に血を啜られなければ、一気に老いるのだ。その事実を知れば、だいたいにおいて、貴珠は性格が歪む傾向にあつた。自分たちに「えられた不老不死が、貴の気まぐれにかかっているのだと、遅まきながら気づいたために。

ともあれ、名前すら忘れた貴種に追い落とされたものの首に絶命の牙を打ち込みながら、太智花はほくそえんだものである。

絶望の味付けは、貴珠の血に、独特的の刺激と苦味とを「与える。

その味を、太智花はことのほか好み、堪能した。

彼の、してやつたりといつた雰囲気は日障りではあつた。が、太智花は、見て見ぬ振りをする。それは芝居を楽しむ共犯である彼にとつては礼儀であつたのだ。

彼の着衣を引き裂いた。

いつもとは異なる扱いに青ざめた少年の左胸に、無造作に爪を立てる。

ドクドクと手の中で、貴珠の心臓が悲鳴をあげているのが、心地よく感じられ、太智花のくちびるが、自然と笑みをかたちづくった。

それは、人ならざるもの、壮絶なまでの艶を帶びて、少年を魅せた。

それまでの恐怖を忘れたかのように、少年は、うつとりと、太智花にからだを預けた。

怯えた表情にも、それ自身にも、太智花の心は、なにひとつとして、感慨を覚えることはなかつた。

ではなぜ、自分はあの貴珠に、あんなにも心を動かされたのか。

少年の心臓に牙を打ち込んでいながら、太智花の心の中、浮かび上がつてくるのは、あの貴珠の苦しげな表情ばかりだった。

目覚めた顔を一刻も早く見てみたい。

おそらくは褐色だらう双眸に、自分自身を映させたかった。

見た目ならば、この貴珠のほうが、はるかに美しいといふのに。

愛しい。

思いもよらぬつぶやきだった。

いとい  
？

太智花が、この自分が、ことばすら交わしていないあの貴珠のこと

あまりにもらしくない感情に名前を与えることは、それをそうと認めるることは、まだこの時の太智花の貴としての矜持がよしとはしなかった。

貴珠など、利用価値があるというだけの、ただの糧だ。貴の力を強くすることができる力が、わずかばかり、香よく味わい深い血に含まれているというだけの、ただの、喋る家畜に過ぎない。

そう。

家畜に過ぎないことを知らない、憐れな…………。

太智花は、己の感情に口をつぶり、手の中でぴくぴくと震えている心臓を、握りしめた。

鋭い悲鳴が、貴珠の口から、迸る。自然、こみあげてくるのは、なんともわからない、哄笑だった。

太智花は、貴珠から手を離し、館を後にした。

誰もいなくなつた部屋で、貴珠がくちびるを噛みしめ、太智花が出て行つた後の扉を凝視していることなど、その双眸の宿す剣呑な光など、あざかり知らぬことであつたのだ。

その日も、また、太智花は、眠りつづける貴珠のもとにいた。

いまだ目覚める気配のない貴珠は、太智花の寝室の隣に移していった。

太智花の元に来て、十日になる。

熱は下がつていたが、頑ななまでに、覚醒する気配はない。

いつそつのこと、頬がこけ、顔色が悪い。

太智花は、迷つていた。

迷つなどといつ、己にあらざる感情をもてあましながら、貴珠の喉の赤い傷に指を這わせた。

目覚めを待たず、自分のものにしてしまおつか。

あの日、太智花の氣を惹いた血を、吸つてしまおつか と。

久しぶりに結界から出ていた太智花の鼻先をふと嗅ぎたものは、聞き覚えのある薫香だった。

貴珠の流す血の匂いだと、わかる。

貴珠の血も、千差万別である。

ただ匂いだけがよいものもあれば、逆もある。濃い匂い、淡い香。まろやかな、後を引く味わい。ねつとりと濃い、一度口に含めばしばらくは口にしたくないと思つような味もある。

しかし、それは、これまで聞いたどれとも違う。

独特な、匂いだった。

なんと表現すればいいのか。はかなげでさえあるのに、妙に無視することができないような、不思議な吸引力を持つ、香だったのだ。

だから、もうすでに、貴珠には興味もなくなつていた太智花ではあつたのだが、行つてみる気になつたのである。

炎に照らし出された、紅蓮の地獄絵図の中で、今しも鬼が、少年に喰らいつこうとしていた。

赤と黒の壮絶なまでの明暗に魅せられていた太智花は、なぜか、

鬼の行動を止めていた。

そうして、捧げられた、貴珠を、受け取ったのだ。

鋭いもので傷つけられた首から流れる血は、固まりかけていた。

そつと、太智花は、それを、舌先で、舐めた。

その瞬間、口内に広がった芳しさを、いつたい何にたとえればいいだろう。

死にかけの貴珠など、血を最後の一滴まで絞り取り、打ち捨ててしまえばいい。そう考えるともなく考えていた太智花を压しとどめたのは、その、血の、味の故だった。

結界に戻る途中、太智花は、町から、人間の医師をひとり攫つた。

自身の治癒能力が人間に与える影響が強いことを慮つての行動ではあつた。そうして、また、死なせるには少年の血の味は惜しいそう、思つたからもある。

だというのに。

太智花は、自分を、呪つた。

目覚めた貴珠の血を、しかし、太智花は、瞬らなかつたのだ。

何故かはわからない。

暗い、黒に近いような、褐色のまなざしだった。

太智花を見ても、驚きもしなければ、恐れもしない。

ただ、無機物を見るかのように、その双眸に映しているだけだった。

太智花は、手をこまねいていた。

まつたく、太智花らしくないことに、だ。

毎日、少年のよつすを見、食事をさせた。

そう。この太智花が、手ずから、貴珠に である。

口元にやわらかく煮込んだ食べ物を運んでやれば、一口か一口は、食べる。しかし、それ以上は、頑として、食べなかつた。いや、食べることができないというのが、眞実ではあつたろう。一度、無理に食べさせた時、少年は、苦しげに、吐き戻したのだから。

心の病です。

少しあここに慣れたのだろう、医師が、以前よりは落ち着いた風情で、こともなげにそう、告げた。

心の  
。

貴珠とは、人とは、なんと脆い存在なのだ。

このままの状態で太智花が血を啜れば、この少年は、永劫このままである。そう。心の病に囚われたまま、太智花が飽きるまで、生きつづけることになる。

ただの貴珠なら、それでもかまいはしない。そう思つ心が、確かに、太智花にある。

しかし、これは、違うのだ。

何故かはわからないが。

いや、違う。理由なら、すでに、わかっている。

そう 認めよう。

太智花は、この貴珠に、心を奪われているのだ。

愛している。

愛しているのだ。

太智花のことを、この貴珠が認めぬまま、生きつづけることなど、太智花には、堪えられそうになかった。

そう。

いまだ、この貴珠は、太智花の存在すら、本当の意味では知らないままなのだ。

そんなことが、どうして、許せるだろう

母親にそつと隠すようにして手渡されたそれを見て、少年の表情が、泣き笑いになる。

それはかつて勾引されたおりに母の手荷物の中にあつたという、彼らの出自を証立てる唯一の物だった。

身重の母は夫を亡くし、親戚の元へと向かう旅の途中で、この村の人間たちに攫われ今に至るのだ。

素肌にまつた丈の短い着物の懷に、そつと、少年は、それを隠した。

村人達に連れてゆかれる母が、最後に、少年を振り返る。

そのくちびるが動いた。

青ざめ、ひび割れた、血色の悪いくちびるが、音のないことばを紡ぐ。

その先には、深く掘られた、穴が口を開けている。

からからに乾いた地面に人を埋められるだけの穴を掘るのは、大変なことだつただろう。

いのために、自分たちは、生かされているのだ。

自分たちが攫つておきながらお荷物と糞み、穢れた血と忌み嫌いながら、それでも、生を繋ぐだけの物は与えつけた。

ただ、村人達に代わり、なにかがあれば命を差し出すものとして。

かあさん。

母親が、穴の底に下ろされてゆく。

生きながら、埋められるのだ。

水を乞ひ代償として。

いらない。

かあさんが殺されて、それで与えられる水など、ほしくない。

「この村に、未練も愛着もない。

あるとすれば、ただ、嫌悪と、憎悪だけだった。

いつか、逃げ出そう。

そう、思い続けていた。

かあさんを連れて、どこか、忌者の伝承がない土地に。  
ど、少年は、知っていた。

忌者の伝承がない土地など、どこにもありはしないのだと。

ただ、人知れず、身を隠していたかった。

ただ、ふつうに暮らしたかった。

畑を耕して、実りに感謝する。それだけでよかつたのだ。

それが、自分たちには　自分には決して許されないことだとし  
ても。

少年は、手の中にあるものを、そっと、見下ろした。

村人達は、少年の母親に注目している。

今だけだ。

そう思った。

自分たちを閉じ込めてきた、岩屋から出るのは、今だけしかない。

岩屋から出て、かあさんを助けて、それで、逃げる。

自分たちも渴いているけれど、村人達も渴いている。

体力的に、そんなに差がないのに違いない。

少年は、岩屋の格子に、母親に手渡された懐剣をつきたてた。

自分の喉に、懷剣の切つ先を押し当てる。

真つ赤に興奮していた村人達が、真つ青な顔に変わり、うろたえる。

やめろ。

よせ。

村長が、自分たちを口汚く罵つてきた村人達が、不安げに、手をこまねくさまは、見ていて、楽しかった。

かあさん。

もつとまやく岩屋を抜け出せていたら。

かあさんも、やつらのこのままを見れたのに。

逃げ出した少年が穴の底に見たものは、すでに、息をしていない母親の姿だった。

知らなかつた。

水を乞う代償は、生き埋めではなく、血を流しながら埋められてゆくことだったとほ。

だから、ここからは、オレを使わなかつたんだ。

どこか遠くで、そう納得している自分がいた。

自分が血を流した瞬間に起きるだろう、阿鼻叫喚の地獄を、村人達は、いや、世の人々は、恐れている。

この血が流れるせいで、忌者と、薙まれ、少年は、鎖され続けてきたのだ。

自分の流す血の匂いに誘われて現われるだろう、鬼や奇の存在を、人は、何よりも、恐怖しているのだ。

かあさんは、もういない。

こいつらに、殺された。

もういい。

どうなつたつて、かまわない。

少年は、少年がとることのできる一番壮絶に見えるだらう笑みをたたえた。

涙を流しながら、笑い、そして、一息に、喉を、掻き切つたのだ。

痛みと涙とに震む視界に、少年は、慌てふためく村人の姿を、とどめて、目を閉じた。

やがて集うだらう鬼や奇に、自分もまた食われるだらうが、かあさんの敵を討てたのだ。これまでにたまりにたまつていて憎悪を解放した清々しさで、喉から血を流しながら地面に横たわる少年の面は、いつそ穏やかな笑みを、たたえてさえいたのである。

空が搔き曇り、風が吹きはじめる。

どこか生温かい風は、村人達の恐怖を煽るばかりだつた。

どこからか、けたたましい叫び声がひびいてきた。

村人は、弾かれたように、おのおのの家に駆け込み、戸口をしつかりと閉て切つた。

家の隅に小さく蹲り、震え慄く。

家の外は、ただならぬ騒ぎで、先までとよく似た、しかし、異質な興奮が吹き荒れているかのよつだつた。

人ならぬ者のざわめきが、増えてゆく。

大氣は、いまや、異形の氣に満ち満ちた濃厚なものになつていて。天候すら、異形の氣に中でられたのか、雷が、巨大な猫の喉鳴りめいた音をあちこちで狂つたように轟かす。村人は目が回り、息をするのすら苦痛極まりない状態にあつた。

異形のざわめきは、最高潮に達していた。

何がどうなつて いるのかを確認する勇氣のある村人は、ただひとりとして存在してはいなかつた。

ただただ、異形たちの狂乱が自分たちの上に降りかからなうこと を祈るばかりだつた。

しかし

狂つた猫の喉鳴りめいた雷が、不意に、牙を剥いた。

鋭く尖つた金の牙をきらめかせ、魂消るよつた轟音を響かせる。

長い湯水に苦しめられてきた村の家は、あまりに容易く、赤い炎を宿した。めらめらと燃え上がり、ケラケラと異形の笑い声が、悲鳴の合間に村人達の耳を射た。

見えざる太鼓が叩かれるかのような痛いほどの音をたてて、家が、木々が、雷に燃やされてゆく。

悲鳴が、笑いが、風が、雷が、村中を席卷していた。

最初に現われたのは、小さな、虫ほどの異形だつた。

恐る恐る少年の近くに寄り、そつと、少年の首筋に流れる血を、その舌先でつづいた。

と、異形の動きが、止まつた。

ぶるぶると小刻みに震えだし、爆ぜるよつて、倍の大きさに膨れ上がる。

その後は、遠慮などなかつた。

ただ、一心不乱に、首筋を彩る朱を舐め続ける。

しかし、それは、長くは続かなかつた。

次々と姿を現した、大小さまざま有象無象が、少年を取り囲み、その血の恩恵にあずかつた小さな奇にまで、手を伸ばしたからだ。

逃げるもならず捕らえられた、今は少年の掌ほどの大さになつた小さな奇は、あちこちから伸ばされた異形の手や触手に、絡めとられ、有無を言わさず引きちぎられた。

小さな奇が撒き散らす血の霧が、異形の上に、じばし、朱の雨を降らす。

うつとつと、異形たちが、酩酊した表情で、少年を見下ろす。

次は、少年の番だつた。

雷が、村人の家に落ちたのは、その時だつた。

赤い炎の中で、逃げる術をなくした人の黒い影が、まるで滑稽な踊りめいた動きを見せていた。

どつと、はぜ割れるように、異形たちが、笑う。

手を叩き、膝を叩きながら、思わず見世物に、喝采を送る。

次から次へと火柱を上げる人々は、燃えさかる巨大な篝火と化す。豪勢な篝火に照られた少年を、どの異形が最初に思い出したのか。

伸ばした手が、別の手に止められる。

我先に少年を喰らおうと、異形たちの間に、小競り合いが起つりはじめた。

それは、たちまち異形同士の殺し合いへと変貌を遂げ、村は、まさに、地獄絵図の様相を呈していた。

血や内臓、異形のからだが、累々と散らばる中、やがて、雄叫びを上げたのは、勝ち残った異形だった。

剛毛の生えた太い手が、少年を無造作に掴みあげようとする。

異形の長い舌が、少年の首にこびりつき固まりはじめた血を、一舐めした。

大きな体が、ぶるりと震え、奇妙にあざけないさまを見せて、異形が目を閉じる。

それは、まるで、少年の、血の味に感動しているかのようだった。

異形の目が、少年をにらみ付ける。

何か逡巡しているような表情は、しかし、美味の前ではあまりに  
はかないものだった。

鮫の歯めいた鋸状の歯列をあらわに、異形が少年を覗らおうとした  
その時、突然、異形の動きが止まつた。

自身で止めたのではない。

その証拠に、異形のまなざしが、驚愕を宿して、見開かれている。  
それからと動く眼球を残して、なにひとつ動かせずにいるのだった。

やがて、眼球が、動きを止めた。

いまだ燃えつづけている数多の篝火を映しながら、異形の眼球は、  
一点を凝視していた。

異形のまなざしに、恐怖が宿る。

純粹な恐怖であったのかもしれない。

止まることのない震えが、異形を支配していた。

その異形の視線の先には、ただ、端然と佇む男の姿がある。

黒地に炎にきらめく縫い取りの高価だらう着物と、袴とが、時折

り風に、煽られ揺れる。

男には、無造作に立っているだけだとこの、異形を怯えさせ  
るに足る威圧感が、たたえられていた。

闘つまでもなく、異形は、存在自体で、すでに、敗北していた。

動きはじめた男に、異形が、震えながら、少年を差し出す。

男は、ただ、当然と少年を受け取ると、一顧だにせず、その場から搔き消えたのである。

後にはただ、ひとつずつ村の残骸と、累々と散らばる異形の屍だけ  
が、残されていた。

少年の記憶をさぐつた太智花は、珍しく、後悔した。

虧された過去が、母親の死が、少年を、苦しめていた。

太智花が記憶を探つたせいなのか、少年は、突然、正気を取り戻した。

滂沱と流れ落ちる涙が、少年の頬を濡らしている。

苦しさに胸元を押さえても、少年のくちびるが、うめきを漏らすことにはなかつた。

震えるからだの細さが、痛々しく思えてならなかつた。

知らず、太智花は、少年 記憶の中で、少年は織衛おつえと呼ばれていた を、抱きしめていたのである。

少しづつ、太智花は織衛を、屋敷から外に連れ出した。

首の傷はふさがり、しかし、結局、声を出せるようにはならなかつた。

ただ、骨ばかりが目立っていた体形が、わずかではあつたが丸みを帯びてきていた。 それだけが、太智花には救いに思えたのだ。

織衛 と、呼びかければ、ゆっくりと振り返る。

しかし、そのまなざしは、暗いままである。

その表情が、動くのは、ただ、過去が脳裏を過ぎるのだろう、辛そうに顔をしかめるときだけだ。

「笑え」

顎をもたげて、やう見下ろせば、織衛は、太智花の腕の中から、逃れ出ようとする。

花々で満ちた結界の中、織衛だけが、黒々とした影をまとつているように、太智花には思えたのだ。

まさに百花繚乱と呼ぶにふさわしい、季節も何も無視した花々の狂い咲きすら、織衛の双眸には映っていないのだろう。

ただ、過去に、母親の死に囚われているのだ。

ちりちりと、胸が、焼ける。

これが、嫉妬の焰なのだと、太智花は、ひつそりと自嘲する。

織衛の母親に、太智花は、嫉妬しているのだ。

喉の奥にこみあげてくる苦い笑いを、おさえる術は、なかつた。

それでも、日々は穏やかだつた。

胸に渦巻く思いはあるものの、太智花は、存在してはじめての、愛しいものを手に入れた。

もう少し、もう少し織衛が健康を取り戻せば、そうすれば、太智花は、織衛に、永劫を与えるのだ。ただの貴珠に与える不確かなものでなどない、真の永劫を与えるよう。

織衛が太智花と共にあつってくれることを、太智花は、強く望んでいた。

いつかは、織衛も、太智花に微笑んでくれるだろう。

我ながら女々しいまでの願望にすがる自分に、苦笑を、禁じえなかつた。

しかし。

「こんなことになるのなら、吸つてしまえばよかつたのだ。

見る影もなく老いた貴珠が、足元には、転がっている。

太智花は、まだ脈打つている手の中の貴珠の心臓を握りつぶした。  
餓えた匂いを撒き散らして、かつては貴珠であつたものの血が、  
飛び散つた。

織衛を汚した血を拭いながら、太智花は、脇腹血を流す織衛を抱  
きしめたまま、屋敷へと急いだ。

貴珠の館のことなど、忘れていた。

なにが起きたのか、気づいたときには、条件反射のように、貴珠  
の胸から、心臓をつかみ出していた。

貴に血を吸われなくなつて久しい貴珠の血は、どろりと、濁つて  
いた。

死を間直に感じた恐怖から、貴珠は、暴挙に出たのだろうか。す  
でに、まともに喋ることすらできないほど老いていた貴珠は、ただ、  
喚きながら、織衛を、その手にかけようとしたのだ。

貴珠の骸は、花々が、貪欲に、食るだらう。

数日もすれば、骨さえもぼろぼろに、砕けてしまつに違ひない。

かすり傷ですよ。

織衛の傷を見てのあきれたような医師の口調に、太智花は、カッとなるどころか、緊張がほどけてゆくを感じていた。

よかつた。

心の底から、太智花は、そう思ったのだ。

なのに。

織衛は、

「死にたかったのに……」

掠れた、か細い声で、そう言ったのだ。

刹那、太智花は、自分を抑えることができなかつた。

太智花がはじめて聞いた織衛の声がつむいだことばが、太智花の逆鱗に触れたのだ。

目の隅では、医師が、よろめきながら、後退する。

気がつけば、太智花は、織衛の心臓を、掘み出していた。

織衛の悲鳴が、不思議なほど耳に心地好かつた。

脈動を繰り返す心臓に、太智花は、口を寄せていた。

芳しい香が、鼻腔を満たす。

太智花は、織衛の心臓に、牙を突きたてた。

織衛の、甲高い悲鳴。

これ以上はありえないだらう美味が、口の中にあふれ出す。

それを飲み下し、ぞろりと、心臓を舐めた。

それだけで、織衛が、跳ねるように、慄いた。

クツクツと、狂つたような笑いが、太智花の口からこぼれ落ちる。

そうして、太智花は、自身左胸から心臓を、引きずり出したのだ。

医師が、腰をぬかして放心したように、こちらを見ている。

あまり、知られてはいないことだが、貴の心臓は、右と左にひとつづつ、一対あるのだ。

そして

ああ　と、織衛のひときわ甲高い悲鳴が、かすれて、消えた。

太智花は、太智花の左の心臓を、織衛の心臓があつた場所へと押し込んだ。

織衛の心臓を、太智花の左の心臓があつた場所へと。

これが、唯一の例外だった。

そう。貴珠が、定期的に貴に血を啜られなくとも、老いる心配がない。

ただし、その負担は、貴珠に、壮絶な負荷をかけることになる。

織衛が、苦しげに、蹲り、藻搔いている。

それを、太智花は、愛しく、見下ろす。

大丈夫だ。

「死なせはしない」

これから織衛は、一ト月かそれ以上、仮死状態になるだろう。しかし、それを過ぎれば、太智花の心臓は、織衛に馴染み、織衛に、貴と同じ不老不死を与えるのだ。

そうなれば、織衛、おまえは、

「私の永劫の伴侶だ」

太智花は、藻搔く織衛を抱き上げ、額にくちづけた。

うつすらと開かれた織衛のまなざしの中に、くちびるをゆがめた  
太智花の顔が映っていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9876u/>

---

ほむら

2011年7月21日03時17分発行